東京都市部における
森・川・海とそのつながりを基調とした水圏環境教育
Aquatic Marine Environmental Education Emphasizing Forest-River-Ocean Relationship at Inner-City Area In Tokyo

須賀沢子(東京海洋大学)・佐々木剛（東京海洋大学学術研究院）

【要約】

現在,「森川海のつながり教育」は自然環境に恵まれた地方都市を中心として行われ，東京都市部においては前例がない。本研究は，東京都市部の環境を題材とした森川海のつながり教育を実施し，プログラム参加者の森川海のつながり意識の変容を明らかにすることを目的とした。記述内容や質問紙を分析した結果，参加者に流域意識が芽生え，自然環境を森川海のつながりの中で保全しようとする改善意識が生まれたことがわかった。また，体験活動を通して東京都市部の森川海への帰属意識が芽生え，水質や親水環境を改善したいという将来への想いを抱くようになった。これは自律的で主体的な行動への意欲を示すものと考えられた。

【キーワード】

水圏環境教育，体験学習，水質改善意識

Ⅰ　はじめに

（１）森・川・海とそのつながりを基調とした教育の現状

日本は四方を海に囲まれる島国であり，多くの山々と河川を有する。古くから「森・川・海とそのつながり」(以下「森川海のつながり」とする）の中で生物多様性が育まれ，人々は豊かな自然の恵みを享受してきた。しかし，高度経済成長期以降，人々の森川海に対する意識は低下し，それに伴い，公害や自然環境破壊などの問題が発生するようになった。そうした中，1990 年前後から宮城県気仙沼市における「森は海の恋人運動」[1)]をはじめとした森川海を再認識しようとする取り組みが実施されるようになった（若菜　2001）[2)]。2003 年までに青森県・秋田県・岩手県の東北三県は「ふるさとの森と川と海の保全及び創造に関する条例」を発令し，森川海を一つの流域として捉え，上流域と下流域の住民・県・事業者等が協働して，県民の豊かな生活を送る基盤となっている森川海を次世代に引き継ぐことを目指すようになった。2013 年，環境省は「上流下流域，農村漁村と都市とがしっかり結び，多様な世代や組織が支えあう，森里川海のつながりを引き出す社会」を目指し，「つなげよう，支えよう森里川海」プロジェクトを立ち上げた[3)]。

このように森川海のつながりが重視されつつある中で，森川海のつながりを再認識させる「森・川・海とそのつながりを基調とした教育」（以下「森川海のつながり教育」とする)」の必要性も高まっている。森川海のつながり教育は流域（源流域～河口域，海域も含む）の内発的発展を可能とし，「流域思考」を身につけることが期待されている（佐々木　2016）[4)]。流域思考とは，地球環境問題が深刻化する中，流域を単位とした学習創造コミュニティの構築によって省資源，循環型社会を確立しようとする考え方である（岸 2002）[5)]。

一方で，現在の森川海のつながり教育は「森は海の恋人運動」や岩手県宮古市における「サクラマス MANABI プロジェクト」をはじめ，自然環境に恵まれた地方都市を中心として行われており，東京都市部においては未だ事例がない。なお，本稿における東京都市部とは主に東京 23 区を指す。水圏環境教育の目標は「身近な水圏環境を科学的に観察し，水圏環境に関する諸問題について人々とともに考え，総合的知識である水圏環境リテラシーを理解し，広い見識に基づいた責任ある決定

http://www.jamee.info/file/jameer/2018/jameer111926.pdf